

## 「主の日に葬式を」

2014年05月05日

主の日に教会での礼拝を休んだのは、病気以外では初めてである。その代りに、葬儀場で葬式という礼拝を守った。以前「葬式は礼拝である。私の葬式は礼拝として行ってほしい」と強く主張した人の言葉を思い出した。主の日の葬式は、隠退したからできたことであつた。

前々任地の教会で、教会生活を共にしていたご夫妻の奥さんが87歳で召された。前から、ご長女に母が召された時は、私に葬儀をしてほしいと言われていた。若く未熟な牧師であつた私を支えてくださった方である。喜んでお引き受けした。

前々任地の教会で出していた小さな「小冊子」が残っていた。それを読み返し、召されたご夫妻の信仰を彷彿と思い出した。ご主人はシベリヤ抑留を経験していた。日本に帰れる希望が見えず、飢えと寒さと厳しい労働の地獄のような状況の中で、人間の自己中心にならざるを得ない醜悪な姿を見てきた。帰国後も、その姿が心に焼き付き、それが教会につながる求道の契機になっていた。奥さんは、当時猛烈社員であつた主人を支え、育児に励んでいたが、満たされない日々であつた。友人が教会に行っていると聞き、教会に行ってみようと思った。ご主人に言うと、一緒に行くと言え、驚いたと書いている。共に、心の中で求めていたのである。ご夫妻で、教会に行き、そこで主イエスの福音と出会う幸いを得た。以来、ご夫妻は熱心なクリスチャンになり、教会生活を喜び、励んでいた。

ご夫妻は揺るがぬ信仰で、教会に奉仕し、牧師の私を支えてくださった。17年前、ご主人を亡くし、寂しかつたらうが、最後は、お母さんと弟さんのいる所に落ち着いた。今まで二回お訪ねし、懐かしい再会を喜び合った。最後の時は、話すことはできなかつたが、本当に美しい天使のような顔をしておられた。彼女の神に委ねた信仰が生み出した平安であると思つた。

彼女は「小冊子」に「試練を受けて」と題し「証」を書いている。子どもの養育で、思わぬ試練を受け、夫妻で悩み、うろたえた。しかし、パウロのローマの信徒への手紙5章3節～5節「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」の御言葉から平安を得ている、更に、この試練を通して、苦しむ隣人への思いを深めたと結んでいた。

信仰に生きたご夫妻の「証」から、彼女を忍んでの葬式であつた。キリスト教の葬儀を経験した人は少なかつたが、その葬儀を感謝され、遺族から、両親の信仰を初めて聞いて慰め、励ましになったと言われた。信仰生活は地味であるが、人を生かす喜びであることを、私も嬉しく感謝した。